



きもの —染めと織りの芸術—

平成9年4月30日～5月23日

長い歴史を持つきものですが、着方は多少変化しても、形はほとんど変わっていません。形が変化しなかったゆえに、素材や柄、そして色に変化を求めることになり、染織技術が発達しました。

今回の展示では、いくつかの染めと織りの技法と、その技により生まれ、人々を彩ってきた、きもの達をほんの一部ですがご紹介したいと思います。

展示資料一覧

<>内は当館請求記号

〔染め〕

一般に、染めのきものは、すでに織り上がっている白生地、日本画のような絵模様を後から染めます。これを後染めといい、友禅染・絞り染め・型染め(江戸小紋・紅型など)等、多種多様な方法があります。また、晴れ着中心で、織りのきものより格が高いとされています。

1. 日本染織地図—創造と伝承—

朝日新聞社編

<KB441-162>

東京 朝日新聞社 1985.6 162p

京友禅の創始者は、元禄時代に京都祇園に住んでいた扇絵師、宮崎友禅齋といわれている。多彩で華麗な絵模様の、日本を代表する染めである。大きくは手描友禅と型友禅の二つの技法に分かれる。

2. 手描友禅染の技術と技法

京都 京都市染織試験場 1984.3 289p <PB121-36>

手描友禅では、模様の輪郭を細い糊で防染し、その内側に筆や刷毛で色を挿していく。

3. 加賀友禅

染織風土記刊行会編 <KB441-139>

東京 泰流社 1983.4 173p

石川県(加賀)金沢市を中心に染められている友禅染。京都の友禅染に比べて、江戸時代のものに近い感覚を持つと評される。模様は非常に写実的で、素材としては花鳥など昔ながらのものが多い。また、「虫食い」といって、木の葉に虫が食った跡の模様を付けるといったことが特色である。

4. 加賀染太郎田屋与右衛門

高桑砂夜子著 <KB441-E51>

〔金沢〕 加賀染振興協会 1991.3 262p

5. 琉球紅型の美展

西宮 西宮市大谷記念美術館 1983.1 83p <KB16-E1047>

およそ400年前に完成されたといわれる紅型は、琉球王朝が生んだ色彩豊かな型染めのきものである。どのように多彩なものでも、使用する型紙はわずか一枚で、その型紙で糊置したあと、顔料や植物染料で細かく染めていく。

6. 日本の染め織り—伝統美と職人の世界—

中江克己著 <KB441-127>

東京 紀尾井書房 1982.5 271p

伝統的な紅型には、明確な色と柄の決まりがあった。例えば、鳳凰や龍に花鳥が描かれたものは王族用、花鳥だけでも王族用、若衆型と呼ばれるものは王族の子女用、というように決められ、貴族は自分専用の型紙を持っていた。また、地色に用いられるあざやかな福木の黄はかつて王家の色として禁色となっていた。

7. きもの随想—織と染—

馬場あき子著 <KB441-133>

東京 美術公論社 1982.10 178p

江戸小紋は、江戸の武士の袴の紋様として使用され発達したといわれる。

8. きものに強くなる—きものの常識と着こなし—

東京 世界文化社 1990.10 258p <EF25-E308>

9. 江戸小紋

岡正之佑著

<KB441-179>

東京 岡巳 1979.5 102p

型紙は伊勢の白子で彫られ、型の模様によって彫り方が違う。代表的な彫り方は、突き彫り・錐彫り・引き彫り・道具彫りの4種。

10. 日本の絞り

安藤宏子本文

<KB16-E1172>

京都 京都書院 1993.10 95p

布を糸で括り、染め、糸をほどくと白い斑点が美しい模様を作り出している。これが絞り染めの原点である。絞り染めには、鹿子絞りを代表とする京絞り、絵画性の豊かな絞りと描き絵を併用した辻が花絞り、木綿の絞りとして庶民に親しまれた有松絞り等がある。

11. 日本の染織 12巻 絞り染—古代から続く優美な染め—

本吉春三郎〔等〕著

<KB441-44>

東京 泰流社 1976 212p(図共)

12. 絞りの括りと染め

沖津文幸著

<KB441-E73>

東京 理工学社 1994.1 127p

疋田絞り(ひったしぼり)は、鹿子模様を表現する括りであり、絞り染めの中では最も華麗な表現の括りである。地の部分をすべて括る総絞は、きもの場合には括り粒数が15~18万粒にも及び、括りだけの作業で一年もの時間がかかる。

〔いろいろなきもの—1953~1997—〕

13. 美しいキモノ 1号

東京 婦人画報社 1953.11

【紅型】

<Z6-528>

14. 美しいキモノ 42号(1964 春) 1964.3

15. 美しいキモノ 54号(1967 春) 1967.3

【結城紬】

16. 美しいキモノ 82号(1974 春) 1974.3

17. 美しいキモノ 96号(1977 春) 1977.3
【久留米絣】
18. 美しいキモノ 106号(1979 春) 1979.3
【大島紬】
19. 美しいキモノ 127号(1984 春) 1984.3
【友禅打掛】
20. 美しいキモノ 139号(1987 春) 1987.3
【友禅ほか】
21. 美しいキモノ 179号(1997 春) 1997.3
【黄八丈】

〔織り〕

織りのきものは、糸を先に染めておいてから織りあげるので、先染めと言います。絣・紬・お召等の種類があり、仕事着・普段着・気軽な街着として作られてきました。

22. 黄八丈—その歴史と製法—

荒関哲嗣著 <KB441-79>

東京 翠楊社 1978.2 106p

黄八丈とは、伊豆諸島の八丈島で織られている絹織物。柄は縦縞か格子縞で、黄色が主となっているが、広い意味では樺色を主とした鶯八丈、黒が主色の黒八丈も含む。

23. 本場黄八丈

峯元勝太、磯崎乙彦共著 <DL631-E5>

〔八丈町(東京都)〕 〔峯元勝太〕 1986.12 224p

24. 日本のきもの 紬と絣

東京 読売新聞社 1976 190p(図共) <EF25-123>

黄八丈の特色は、その染めにある。黄はメリ安、茶(鶯色)はマダミ、黒は椎というように、いずれも島に自生する植物を染料としている。

25. 着こなしの染と織—きものと帯—

岩佐佳子著

<KB441-145>

東京 日本ヴォーグ社 1984.1 112p

紬とは、真綿を手紬した糸を、経糸・緯糸に用い、手織で織りあげた絹織物。結城紬・上田紬・十日町紬等、たくさんの種類がある。

26. 染織事典—日本の伝統染織のすべて—

中江克己編

<KB2-G2>

東京 泰流社 1996.8 430p 図版16枚

27. 結城紬

中江克己編

<KB441-129>

東京 泰流社 1982.9 135p

茨城県結城市を中心に、鬼怒川沿い一帯の茨城県、栃木県にまたがる地域で古くから織られている。丈夫なことと地風のぼったりした味などに特徴がある。着るほどに艶が出て、体になじむので、「結城は一度、寝間着にしてから外出着にする」といわれ、紬の第一級品とされている。

28. 大島紬の研究—経済・科学・デザイン—

鹿児島県立短期大学地域研究所編

<DL631-51>

鹿児島 鹿児島県立短期大学研究所 1986.3 264p

大島紬とは、鹿児島県奄美大島と鹿児島市で産出される絹平織の高級着尺地。その特徴は、精緻な緋紋様を表し、泥染めをしていることである。このため色は渋く、地風は柔らかい。柄は、幾何文や草花文などを細かな十字緋の組み合わせで織りだしたユニークなものである。

29. 緋

長崎巖著

<KB16-E944>

東京 小学館 1993.4 205p

緋とは、経糸あるいは緯糸の一方、または経緯糸の双方の文様になる部分を他の糸で堅くしばってから染めて緋糸を作り、その緋糸で布面に文様を織りだした織物。久留米緋・伊予緋・大和緋・備後緋等たくさんの種類がある。

30. 日本の染織 4巻 緋—日本の郷愁さそう織物—

織田秀雄〔等〕著

<KB441-44>

東京 泰流社 1975 209p(図24枚共)

